

神戸市かるも地区の場合 その1・町の人々への接近

—ルポルタージュ“かるも”—



宮西悠司

合田康代

やはり、都市計画の歴史も大きな曲り角に来ているのかもしれない。私は、大学を卒業してからく60年代の後半も終り、各都市の総合計画や都市再開発計画、住宅地開発計画等の基本計画やそのための調査を行ってきた。それはあくまで、自治体内部の検討資料の作成が中心であり、また、根幹的な都市施設整備を主目的とした二次的な地区再開発計画や、住宅改良といったものであった。総合計画等の全市レベルでの検討から各地区へブレークダウンしていくという全体主義的な流れのなかで、それらの上位計画が、既成市街地の大部分を占めるスプロール地帯、住工混合地帯、住商混合地帯の生活環境改善にどれほど意味があり、どれほど有効か疑わしい思いがしていた。それは、神戸市内で起きている2つの住民運動、長田区の丸山地区と菊蔭地区の「生活環境としての都市建設を目的とする、住民を主体とした民主的なまちづくり運動」の実践とその成果に触れるにつれて、都市計画に対する考え方や開発手法等に関して大いなる反省と再検討の必要を痛感させられたのとこれからのまちづくりを進めていくのに見のがせない大きな力をひそめているのが、感じられたからである。

また、これら2つの地区を眺めていると、都市にはもはや消滅したといわれる地域社会福祉が存在し、社会学者や建築家たちが求めてやまない、ある一面できびしい姿をもったコミュニティがそこにはある。

従来 of 住民組織は主に行政の下部機構としての性格が強く、住民運動も単発的な反対運動であったり、ものトりの的なものが多かった。しかし、この複雑に組織化され、高度に展開している資本主義工業社会において、この2つの運動体の存在は、深刻な公害や都市問題に悩まされている都市住民

や、都市の生活環境改善を目標としてきた、実際の都市開発に従事している我々にとっても、たいへん心強いものがある。

今回の「真野小学校区生活環境改善再開発調査」の手法研究部会において、私と株式会社都市・計画設計研究所の小林郁雄は、このような地区の1つをさまざまな角度から検討できたことは、今後の我々の仕事の立場と役割を考えるうえでも大いに参考になったと思っている。

2————ルポルタージュ“かるも”の目的

ルポルタージュ“かるも”は、神戸市役所<企画局調査部>から委託を受けて行なわれた「真野小学校区生活環境改善再開発調査」の中の現況調査の1つである。

この一見まが的な調査は、生活環境改善というテーマを設定した既成市街地の再開発を計画し立案するための基礎資料として作成した。その目的は漠然としていたが、今後、この地区の再開発計画を作成するプランナーに、何が大切な事を具体的に教えてくれるものであると感じたからである。一般的に、計画を立てる自治体の担当職員や学識経験者として計画に参加する大学の教授や、プランナーとして参加するコンサルタントの人々は日常的には大変いそがしく、情報社会の渦に巻きこまれてしまって、本当に大切な事は何なのか、忘れがちである。そのうえ、調査をしたくても地元とのかかわりあい、調査手法の問題等、困難が多くある。我々はこの状況をのりこえるのが今回の最大のテーマと考え、それはあくまで偶然性が多すぎ、手法的にはいくつか問題が残ったが、調査のスタートをきった。

3————レポーターのプロフィール

後記のルポルタージュ“かるも”のレポートを書いてくれた合田康代嬢は、神戸大学教育学部在学中、株式会社都市・計画設計研究所においてアルバイトとして、長い間都市調査に協力してくれたかわいい女の子であった。彼女は児童心理学を専攻し、家庭教師をしながら、精神薄弱児に接し、その成長過程を論文にまとめた。我々はその論文を読んで、フィールドワークにおける観察力に大いに魅力を感じていた。たまたま、この調査の企画が進行中に、彼女が家庭の事情で家を捜していることを知り、「それなら、荇藻に住んでみないか」という話になり、この調査が偶然にも快調に進みだした。このルポルタージュは、①彼女自身の生活の感想、②親しくなった人達の日々の話題、③地区内のほとんどのお店に実際に行ってみた感想、④自治会主催のあらゆる行事に参加した感想、⑤子供の勉強塾を開いたこと……等々を土台としてまとめられている。期間は、昭和46年12月10日より、47年5月までで、居住場所は地区の中央部よりやや東南の東尻池八丁目のアパートであった。彼女は、レポートにあるように、大学の専攻科に通学するかたわら、生活費の糧に地区内で塾を開き、彼女特有の方法で地域社会にとけこんでいった。しかし、彼女の向学心は、日本の国を飛び出し、ドイツの大学に入学するためにハンブルグへ行ってしまった。今もドイツで日本語学校の教師をしているらしい。

彼女は、彼女なりにこの町が気に入ったらしく、帰国したら、またここに帰りたいたいという希望をもらしていた。

我々プランナーも、これからこのような地区に事務所を構えて、日常生活を通じて、まちづくりにじっくりと参加してみたいものである。また合田嬢をころよく迎えてくれた荇藻の多くの人々や

陰日向なく気をつかってくれた菟藻防犯実践会の
毛利会長には厚く御礼を申し述べたい。

なお菟藻防犯実践会の活動は華頂短期大学井岡勉

先生が「大都市における地域福祉運動<1>」で
詳細に記録しておられる。

<宮田悠司・地域問題研究会>

※

※

※

◆ ルポルタージュ“かるも” ◆

合田康代

まとめる際には、できるだけ多くの機会から、できるだけ確かで数多くの情報をつき合わせるよう努力したが、期間が短かかったことや、一人であったため、行動範囲や接しうる人々に限界があったことなどのため、なお多くの不明な点やあいまいな点が残ったことは残念である。また、公正な立場で書いているつもりではあるが、私自身の偏見や思い違いも少なからずあるかもしれない。

<以下は、「神戸市真野地区生活環境改善再開発基礎調査報告書」より抜粋再構成、文責・宮西悠司>

I 初めてきた町

11月の末、私ははじめてこの地区にやってきた。まだ寝ぐらが決ったわけではない。下検分というわけだ。

国道二号線のすさまじい車の行列を横切って、そこから南がこの地区—真野小学校区なのだ。いきなりエントツばかりの工場街に入って行くかと思ったら意外にお店があるじゃないか。どこにでもある下町だ。

この町、南へさがると、さすがに工場らしきものが増えてきた。狭い路地を車がひっきりなしにやってくる。道が狭いので、車は、人が家の軒下なんか寄りそうようによけてくれるまで通れない。これが、少し前までは、一方通行でなかったというのだから、どうやって人と車がよけあっていたのかと思う。

お好焼屋に入る。お好焼80円。そば焼き100円という値段。なかなかおいしい。食べながら、このあたりにアパートないかしらともちかけると、かわってくるつもりならと、あっちこっちで聞いた話をくわしくしてくれる。アパートぐらしをしている人は、出たり入ったりがはげしいのかしらと聞くと、この辺は工場街だから居たくてもおられないからねという。そういいながら、おばさんは別にここを逃げ出そうという気はまるでなさそう。私は、しばらくこの町にきてすぐ出ていく人たちと、このおばさんみたいに何十年も住みついている人たちと、2種類の住民の型があるのだなとふと思った。

すっかり話し込んで外に出ると、もうすっかり日は暮れていた。工場街だというのに、町はわりあい静か。それにちゃんと星が見える。

2月10日、私は正式にこの町に引越して来た。まず最初、夜になって真暗になってはと、何はともあれ電気だけはすぐつけようと思ってとりつけていたら、何やらこげくさいにおいがする。さてはどこかショートでもさせたかと、あわてていろいろ調べてみたが、別にどこも異常はない。くんくんにおいを嗅いでみると、どうやら開いた窓から……ああそうか、これがこの町の一般的においだったのだ。その時、工場街の真中にやってきたのだという実感がしみじみ湧いてきた。しかし、その後生活するにつれて、天候や風向き、工場の事情により、臭いの調子も違うことがわかった。全然におわない日だってよくあるのだ。

その日、すぐ前のお菓子屋のおばさんと話をした。すぐ仲良くなる。お嫁に来た時からずっと40年も住んでいるそ

うだ。そして、前に行ったお好焼屋に行ってみる。おばさんはちゃんと覚えていてくれた。こんどは、アルバイトに塾を開きたいんだけどそんな子供達いないかしらと、頼みこんでみると、快くひきうけてくれた。

今は、そのおばさんに紹介されて、かわいい2人の小学三年生を教えている。とてもすなおない子供達だ。

私は、その日、この町のすべてのものから、あたたかく迎えられたような気がした。

II 町の日

この町は朝が早い。登校、出勤時間はだいたい8時前後で普通だが、地区内のほとんどのお店が午前8時までにはあいてしまう。お菓子屋、パン屋、雑貨屋、くすり屋、食料品店、それに喫茶店に大衆食堂。その頃には、路地の中から、真白いシャツをつけた小学生達が2人、3人と飛び出してくる。そして、その路地は、植木に水がやられ、打水がされ、すがすがしい朝の雰囲気になっている。工員たちはくジャンパー姿でわかる。朝食がみそ汁なら大衆食堂でトーストとコーヒなら喫茶店で、新聞を読みながら、若干のよもやま話をして、「さあ、行こか」のかけ声とともに威勢よくノレンをわけて出てくる。ノレンのない喫茶店らしい喫茶店もある。

バスの停留場は、高校生と思われる学生達や、背広姿のサラリーマンらしい人でいっぱい。地区の南と北を貫通する国道2号線や、高松線も今がラッシュ時。地区内の小さな工場の機械も動き始め、路地やアパートに白い洗濯物がひらめき出す。この町がもっとも下町らしい活気に包まれるのはこの時間だ。

このさざなみのような興奮がおさまってしまうと、町はすっかりひっそりとする。主婦も大半が仕事を持っていて、残っているのは手のかかる乳幼児をもっている人ぐらいで、掃除、洗濯をすませた彼女らはそのちっちゃな子を路地や公園で遊ばせたり、抱いたまま同じような年令の子をもつ人と立ち話したりで、この時間道路で見かけるのは、ひっきりなしに入ったり出たりしている自動車と、彼女たちと老人ぐらいである。のんびりしているようだが、少しばかり暇なのは彼らぐらいで、皆それぞれ忙しい。特に、食堂や喫茶店やお好焼屋のなかは、昼、どっとくる客を受け入れる準備で大わらわである。外はガランとしていて、削盤か何かで削る音や、時々、ハンマーでたたく音などが、いがらっぽい空気の中を漂ってくる。

そして、昼、工員たちのほとんどが昼食にやってくる。しかし、彼らは仕事場から近いいつもの店へと直行するのでそれほど往来がにぎわうということもない。ただ、食堂とお好焼屋と喫茶店だけはいっぱい、この中は、はなやいだ空気が流れる。

午後は、小学生達が学校から帰ってきはじめ、道路で遊ぶ子供の姿がみられる。この時間は喫茶店や食堂が最も暇なときであり、駄菓子屋さんの店さきがほんの少しにぎわうときでもある。子供達が10円の「あてもの」や、ガムやチョコレートや氷菓子などを買ってそれを片手に遊ぶのである。4時5時と夕方が近づくにつれて、往来はにぎやかになってくる。仕事帰りの人が増えるにしたがって、いっぱいになるのは酒屋の店さきであり、楽しい笑い声が外までもれている。さらに喫茶店や大衆食堂もお客の出入がひんぱんになる。そしてだんだん町に若い人達も目立ちはじめ、なごやかなくつろいだ空気が流れる。夕暮れから、銭湯へむかう親子連れや工員たちがふえ、暗くなるにつれて、行きつけの喫茶店の閉店により追出されたらしい若い男女のグループが道端にたむろするようになる。二人づれというのはあまりなくて、だいたい4~5人のグループであり、しゃがみこんだり、壁にもたれたり、ひいてきた自動車におおいかぶさるようにしたりしながら、何やらぼそぼそささやきあっている。10時11時になると、町はひっそりとして、寝静まっている家も多い。だいたい朝も早いかわりに、夜も早い。通りには、遅くまで商売していた人や、夜ふかし族が寝る前に一風呂浴びに行くのがみられるくらい。午前0時をすぎると、お風呂屋もそろそろ閉りはじめ、町の灯はほとんど消え、昼夜の区別なく動いている工場を除いて、完全に眠りに入る。この時間から明方くらいまでが最も空気が澄みきり静まりかえる時である。

窓をあけてみると、町の中央にある三星ベルトの工場からのゴォーというかすかな音のほかには、物音はしない。2

～3本の煙突から黒い煙や白い煙がたちのぼっている。昼間よりははずっと少いけれど、夜も出つづけているわけだ。夜明け前、午前4時頃夜勤交代だか早番だかの工具さんが、さそいあわせて出かける声が寝静まった町にひびいてくることがある。ドンドンと戸をたたいて、「おい、そろそろ行こか」「おう」という声とともに足音が遠ざかる。そうして5時を過ぎれば、すずめのさえずり声が聞え、牛乳屋さんや、新聞配達員の自転車が走り出し、早起きの主婦が起き出し、そうして、また新しい一日がはじまる。

Ⅲ 町の人々

A 工具さん

この町の工具さん達、老いも若きも皆お酒と競馬が好き。酒屋やホルモン焼屋ばかりでなく、おこのみ焼屋や喫茶店でも、仕事のあとの一ぱいを飲むのである。貼工のおばさんも、おこのみ焼を食べながら、一ぱいのビールを飲みほして、「ああ、おいし、ほんまに生きとってよかったわー」と感嘆の声をあげたりする。一日のうちで、もっとも彼らがくつろげるひとときであろう。そこでの話題はまず競馬のこと、そして給料のことや、今月のうつぶんばらし、同じ仕事の仲間同士であれば、もっと細かい仕事上のぐち。貼工のおばさん達は、誰が今日いくつ貼ったか、誰が今日条件のよい靴のたばをとったか、誰がいくつも要領よく手をぬいて数をこなすか……等々、そして、ぐちり終えればほっとする。

▼運転手Kさん

彼は、地区内に事務所をもつ、従業員10人ばかりの小さな建設会社の運転手である。運転手といっても、トラックで建材を運んだり、建築現場でブルドーザーやクレーンを運転するのである。年令は23才、家は地区内の長屋に、お姉さんとお父さんの3人暮らし。お姉さんはミシンをもっていて、家でゴム会社からの注文を受けて仕事をしている。Kさんは底ぬけに明るい人で人柄も素朴だ。彼はだれでも楽しい気分させる。仕事場での話—神戸大学の建築現場にいったとき、学食のめし^{めし}がどんなに少なく、何ぱいもおかわりせねばならなかったか、そしてかつてのわからない自分たちが、どんなに恥をかいたか、また、芦屋では芦屋夫人たちが付近の道路の規則を無視し、わがもの顔で走るのが一番腹が立つとか、近所同士みんなに冷たくて、その点長屋でないとかかん……等々をおもしろおかしく話してくれたりする。

彼はこの町で生まれ育った。そのことを冗談めかして、“わしら尻池村出身は、…”と半ば自嘲をこめていったりする。そういいながらも、彼はこの町のよさを十分に知っている。彼は全くこの町の人間だ。又、大学生とか知的階級に文句なしに尊敬の念をいだいており<知的階級に対する一種の偏見ともいえるこの感情は、この町の人全体に感じられることだ。>かといって、うらやましがったり、ねたんだりということは全たなく<その素直さに私は感心するのであるが>、何か自分と生まれも育ちも生き方も別の人種、というふうに思っているように感じられる。そうして彼は彼なりのささやかな人生を夢みているのだ。彼の生き方はいかにも自然でおおらかだ。私などは彼をみているといままで、よけいなことばかりやってきてしまったよう気がしてしまう。

B 主婦

▼主婦と仕事

この町では、主婦のほとんどが仕事に出ている。それも近くのゴム工場や商店が多く、ちょっとはいった食堂やクリーニング屋なんかの従業員は、たいてい顔見知りの主婦だ。この間、かるもプールへ行った時の売店のおばさんもやっぱりそうだ。この町では、子供さえ手がかからなければ、働きに行くのは常識化しているようにさえみえる。隣近所みな働きに出ているのに、自分だけ遊んでいてもつまらないしもったいない、的な雰囲気を感じられる。私のみるところでは、昼間家にいる主婦のうち、手のかかる乳幼児をもつ主婦をのぞくとくこれらの主婦でさえ、子供を保育

所にあずけることができたなら、働きに出たいと思っている人も少なくない>ミシンか何かを自分でもっていて、仕事を家に持ってかえってやっているか、自分のところで何か商売をしていて、その帳簿をつけるなり、手伝いに行くなりして何らかの形で仕事を受けもっているのであり、全くの主婦稼業というのはごく少数であると思われる。

▼主婦の一日

ほとんどの主婦が仕事をもっているので、朝は早く起き、だれか留守番がいるような家は朝のうち洗濯し、食事の用意、そして子供や主人を送り出してから、あとかたづけ、そうじをして出かける。夕方、5時~6時ごろ、仕事の帰りに買物をして帰ってきて、朝洗濯をしなかった人はすぐ洗濯、まだ日のある間であれば、ふとんを干したりもしている。そして夕食の用意……と全くいそがしい。しかし、家にいる方の主婦はどうかというと、洗濯をすませた昼間<朝早くから2度も3度もする>は、話し相手もいず、子供を抱いぶらぶらして、なんとなくいたくつしているのである。にぎやかになるのはやはり、仕事にいった主婦たちが帰ってきて、いっせいに洗濯をはじめると、路地やアパートなんかで、ワイワイ言いながらやっている。この町では、朝から晩までどっかで洗濯物がひらめいている。もし、にわか雨でもくると、近所同士となり合って知らせ合う。そして留守であれば、ちゃんと誰かが軒下に置いておいてくれる。私も何度かこの恩恵にあずかった。引っこしてきて間もない頃、雨に気づいて、いそいで洗濯物を入れに出してみると、もうちゃんと軒下にかかっているおどろいたものだ。今では私も気がついたら、近所の人のを軒下に入れてあげるようになった。

C 老人

65才以上を老人として、Mさんの話によると、かるも防犯地域で約100名くらいいるそうである。しかし、老人がいったいどういうふうになら送っているのか最もつかみにくい。でも、駄菓子屋やたばこ屋なんかの店先は、たいていおじいさんやおばあさんであるし、自治会役員で高齢の人の家は、Mさんは運送屋、Aさんはガラス屋、Kさんは材木屋、Tさんは文房具屋、Hさんは大衆食堂といった具合に、多くは商売をしている。ささやかな商売でもいいから、隠居はしないでやっていきたいと考えて、駄菓子屋やたばこ屋あるいはおこのみ焼屋、くだもの屋などをしている人が多い。自治会などやられていられるのは、昔から店をもち、裕福な家の人で、店は息子や娘にまかせ、暇とお金と馬力のある人たちである。

大半の生活は、朝早く起き<五時ごろ、腹巻き姿で体操をしていたりする>、植木いじりをし、昼間は、テレビをみながら店番し、夕方、帰ってきた息子や娘や孫たちに、店番をかわってもらい、縁台なんかで年寄り同士話しこんだりしているようである。その他、詩吟の会などがなかなか盛況のようで、このような楽しみをもっている人たちも多い。

D 町の子ども

下町の人間らしさというものを最も素直に反映しているのは、やはり子供たちであろう。彼らは実にあけっぴろげで人なつこい。私は個人的に何人かの子供たちと親しくなり、よく家に遊びに来るようになった。ある4年生の女の子は、19になるお姉さんと両親はゴム工場へ働きにいき、2才の弟の面倒をみているという。「みんな、弟のことは私がいるから安心やて」と、その小太りの気の強そうな女の子は、得意気に言ったものだ。ある日、彼女は同級の女の子二人と弟をつれて遊びにきた。「これ、弟」と紹介された男の子は、鼻をこすりつけたまっ黒な顔をして、服もどろだらけで、みるからにきたらしい感じである。4年生の女の子にそこまでの配慮がいきとどかないのも無理はない。トランプ遊びをしている間中、その男の子は一人前にいれてほしくてちょかいをだしたり、あきれば部屋中を走りまわったり、気にいらねば泣きわめいたりした。私は、彼女がどういう風に処置するのかとみていたが、なかなか手なれたもので、適当に弟をあやし、ほかの子も遊びをじゃまされながらも、誰も文句もいわなかった。

子供たちは、もし手持ちのおやつがあれば、それを自参でやってくる。よその家へ行けば、お茶やお菓子が出るなど

とは全く期待しないのだ。そして、自分の食べたものは“ゴミ箱どこ？”と言って必ずきちんとするし、遊んだあとのあとかたづけもちゃんとやって帰る。これらは、よくしつけられた子供というより、それくらいは当然自分でやらねばならなかった彼らの生活習慣が、そうさせているように思える。彼らは、かぎのかかった家へ帰るのが当然のこととして受け止め、劣等感をもったり卑屈になつたりしてはいない。しかし、自分達の生活をよく理解している為か経済的なことに関しては妙に大人びていて、子供らしい無邪気さにかけるようなところも感じられる。

IV 町のおみせやさん

町には多くのお店があるが、その中で、この地区の特徴があらわれていると思われる、それぞれのお店の雰囲気のなかに、町の生活をみてみた。

A ショッピング

ショッピングの場所としては、地区内の尻池市場と、六間道商店街があり、他には、何もかも売っている総合食料品店のようなものもいくつかある。尻池市場の近くの主婦はだいたい尻池市場へ、ちょっとした買物や、ものぐさ組は近くの総合食料品店で、その他多くの主婦が、六間道商店街付近の丸五市場やダイエーへ。

尻池市場は小さな市場であるがひととおりの何でもそろそろ。「人參一本」「じゃがいも2つ」「お豆腐半分」なども、もちろん快く売ってくれる。午後8時ごろまであいている店が多いから、買い忘れをちょっと買いにもいける。総合食料品店は全く便利だ。私などはよく利用する。何かちょっとしたものが足りないとき、2~3分で買いにいける。ほんとうに何でもあるし、値段もさほど高くもないし、夜の10時頃までやっている店もあるから助かる。しかし、買物にきたという気がするのは、やはり六間道商店街である。私はここの商店街がすっかり気に入ってしまった。お魚や野菜は実に新鮮だし安い。それに都心のショッピング街とはまるで雰囲気がちがうのもおもしろい。子供づれのお母さん、おじいさん、おばあさんが多く、いたるところで立ち話しをしている。商店の方も、いろいろな店があり、一週間おくれの週刊紙を半額くらいで売っていたり、たこやきやくしかつ、ジュース、ソフトクリームなどの店頭売りがあつたりする。子供たちだけでなく、お母さんもいっしょに立ってジュースを飲んでいたりする。田舎から直接売りにきたらしいおじいさんが、わずかばかりの野菜をざるに盛り分けているのや、小さな台の上のビンにつけものをいれ、悠然とすわっているおばさんなんかの間と、「買おうなー」と思案しながら通るのは、ほんとに楽しいものだ。

B 喫茶店

地区には喫茶店とそれらしきものが、33軒ほどある。これらの喫茶店は大きく二つに大別されるように思う。それらを区別する名前としては、純喫茶と大衆喫茶というのがだいたい当てているように思う。前者はいわゆる普通の喫茶店で、店も小ぎれいだし、いすのクッションもいい。メニューも普通でコーヒー、紅茶、サンドウィッチ、スパゲティナーなどの軽食で、値段は、コーヒー、紅茶が80円、スパゲティナー、カレーが150円くらい。後者は、外からみても何となく場末を思わせる雰囲気、私は初めて一人ではいる時、少しばかり抵抗を感じた。中は「何々いくら」とメニューを書いた紙がベタベタと壁にはりつけられているし、机やいすもあまり高価とは言えない。こういう店にはたいてい、店の中央かカウンターにガラスのケースが置いてあって、その中に、20~30円くらいの「パン菓子」や「おまんじゅう」や「おだんご」などが並べられている。客は食べたいお菓子をその中からかって選んで食べる。また「わらびもち」や「ところてん」や「ひやしあめ」が夏のメニューの一つに加えられるのもこういうたぐいの店である。値段は前者の店と同じか少し安い。コーヒー60円のところもある。ところで客がたてこんでいる時のこれらの店の様子は、どちらもあまり区別がなくなってしまう。というのは、どこ

もねずみ色や薄茶色のごれた作業着を着た男の人たちでいっぱいになり、店が少々小ざれいであってもお客さんの方に圧倒されてしまうのである。店がたてこむ時間はどの店も同じで、どこもいっせいに一ぱいになり、いっせいにすくのである。つまり、朝8時前後と、工員さんたちのお昼休み、12時から1時の間と、5時以降がいっせいになる時間で、その他の時間はほとんど誰もいなくなってしまうのだ。開店している時間は朝7時半ごろから、夕方6時あるいは8時ごろまでが多く、夜11時ごろまで営業している店がほんの少し。

これらの店内の雰囲気は、客層が同じであるにもかかわらず、やはりどこか異なったものがあるようである。たとえばある大衆喫茶では、なじみの客がはいつてくと、「ごはんさきにする？」などと聞いているので、てっきりごはん類もあるのかと思ったら、客はその店から電話をかけ、うどんを出前してもらった。そしてそのうどんをたいらげてから、その店のコーヒーを飲んだのである。若い人たちは、別に特にきれいな喫茶店を好むということもなく、大衆喫茶の常連にも若い人たちはかならずいる。コーヒー一杯でまんがを読み、店のおねえさんやおばさんなんかといつまでもしゃべっていたりする。

概して、大衆喫茶は古く長い間、町の人々の需要によって少しずつ店の品を変えながら、細々と続いてきたもので、どこことなく家庭的な雰囲気が残っている。

C 食堂

この地区で特徴的なのは食堂である。すし屋、そば屋、ホルモン焼屋などの専門的な店は少ないが大阪に多いようないわゆる大衆食堂という何でも食堂がたくさんある。「うどん、めし」などというのれんがかかっていたら、このたぐいだ。それぞれの店によって得意なおかずはちがうが、季節のお惣菜が、ガラスのケースにずらりとならぶ。

工員たちは、お昼どき、ガラスのケースの前に行列をつくって、順番に、中のおかずを見廻して、「そやなあ、そのサラダとこっちのさばの煮付もらおか、それからみそ汁とめしは大な」といったぐあいに注文して、木の長い粗末ないすのはしにどっかとすわると、即座に注文の品々が運ばれてくる。彼らは、黙々と懸命にごはんをかけこみ、すめば「ごっそうさん」とさっさと出ていく。回転が速いから、お昼の一時間は食堂はてんでこまい。2種類のおかずとみそ汁とごはんが180円～200円ぐらい。こういう食堂は、朝は早く7時30分ごろからやっているかわり、夕方6時にはしまってしまう。日曜はどこも休み。全く工員専用の食堂である。

このように、食堂をはじめ、喫茶店もおこのみ焼屋も酒屋も、工員さん達によって成り立っているようなものだから工員の景気不景気の影響をもろに受ける。不景気だと工員さん達の出費が減り、それがそのまま売り上げにひびくのだ。だから、こういうお店は、工場とともに、工員さん達とともに歩んできたといっても言い過ぎではないような気がする。

D 酒屋

酒屋さんというのは、お酒や醤油を売だけの店かと思っていたら、このあたりでは仕事帰りのいっばいを飲むのが普通である。酒屋さんが盛況なのは、冬だけでなく、夏は夏でビールや冷酒でと、冬におとらずにぎわっている。酒屋さんの方も、もう手慣れたもので、てんぷら・えだまめ・くしかつ…などの肴を準備して待っている。工員の方にしても、お酒代そのままのねだんだし、ちょっと一ぱいにはこれほど手軽なところはない。お金でもあつて、もう少しちゃんとお酒を飲むつもりなら、他のホルモン焼屋や大衆酒場、すし屋等へ行けばいいのだ。＜考えてみると、地区内にはスタンド・バーのようなものはみあたらない。＞

酒屋の店さきで立って飲む一ぱいは、まさに肉体労働から解放されたという証拠であり、これから帰る家での生活とのギャップをも埋めるのである。

E 駄菓子屋

この町には駄菓子屋も多い。他のお店が大人のものであるのに対して、駄菓子屋は子供のお店である。駄菓子屋とい

っても、昔とは店の感じも売っているものも、ずい分変わってしまったが、それでもやっぱりちゃんとその位置を確保しているのだ。

店番はどこでもおじいさんかおばあさん。ガラスのケースやガラスのビンの中に、おかきやせんべいやクラッカー、そしてどんどん売出されている新しいお菓子も雑居している。それらは50g、100gと計り売りしてくれる。それから、アイスクリームやキャンデーや、赤や緑や黄色の長細い氷菓子。近ごろの子供はぜいいたくになったというけれど、少なくともこのあたりの子供にとって、それはたまにであって、やはり日常は、10円20円のこづかいをもって駄菓子屋の店さきに立つのが楽しみの一つなのだ。10円玉をにぎりしめ、目をかがやかせて、「ちょうだい」と言ってやってくる小さな小供の姿は昔とかわらない。

F お風呂や

この地区では、たいていのお家にお風呂がないから、みな、おふろやさんに行く。私はここへ来て初めて銭湯へ行った。行ってみるとなかなかいいものである。特に子供の時分から馴じて来た人にとっては、“ふろや”は一種のリクリエーションとコミュニケーションの場でもある。

“ふろや”では、いつもいく時間に必ず出会う人達がいる。だから、もし出会うねば、「おい、おまえきのうどないしたんや」ということになる。私をはじめて子供達と仲よくなったとき、お互いの家がわかると、彼らは最初に「あれ、お姉ちゃんおふろ何時頃行くの」と聞いたのである。行く“おふろ”は同じなのに、それにしては今まで出会ったことがないという意味らしい。そこで私は少し時間を早めた。

お風呂の中では「お姉ちゃん」と呼んだだけで、はずかしそうにしていたくせに、次の日、他の子に「私きのうお姉ちゃんと会ったねえ」と得意げにいう。

“おふろ”は出会いの場。一日中顔を合わせることがない主婦同士も“おふろ”では必ず出会うということもある。

“おふろ”のなじみができる。おばあさんの背中を流してあげたり、赤ちゃんを抱いた主婦に「抱いとつたげるからあんたは早う身体を洗いなさい」と手を出したり……。

そしてまた“おふろ”は話題の場。忙しい主婦や、あまり話し相手のない老人達にとって、ほっと一息ついて話ができる場所。「こないだ、あそこのアパートに入った泥棒つかまったんやと」と、ある主婦がおばあさんに話しかければ、まわりの人が「へえー」と話の中に参加し、話題は次から次へとつづいていく。若い女の子同士の話では、太っているからパンティストッキングがあわないとか、どこそこの店にはどんなに安い物があるとか、その他、男の子のはなし、下着のはなしまで、女同士の気安さと、風呂やの解放感が伴って、話題はつきない。赤ちゃんでもいればみんながのぞきこんであやしたり、つついたり……。

“ふろや”の雰囲気というのは、ほんとうに不思議である。知らん人でも、自由に、誰かの話題に出入りすることができる。そして、誰かの冗談にみんなが笑ったりする。40円のふろ代は高いと思ったけれど、一日の疲れをおとしてゆったり楽しむことができれば安いものである。

V “かるも”と子供たち

A 子供の遊び場

この地区ほど子供の為のスペースがないところもめずらしい。いったい子供達はどこで遊んでいるのだろうか。

路地は、多くが幅がせますぎて、子供の集団遊びの空間として適していないらしく、路地で遊んでいるのは集団遊びが形成される以前の小さい子供と母親等でそれほど多くない。最も多いと思われるのは、道路とか駐車場などの空いた場所である。真野児童館や、尻池五丁目のあき地などもよく利用されている。

道路は子供達にとって格好の遊び場らしく、自転車乗り、ローラースケート、なわとび、ちゃんばらごつこと、駐車

違反の車の間をぬって走りまわっている。もちろんここは最も危険な遊び場でもある。しかしそれは子供たちもよく知っていて、たとえば数人でなわとびをするときなど、一人がとんでいるとき、他の子はその子がいくつとべるか見ると同時に、車の監視役でもあって、車がくると、「来たよー」の声でみんな一時遊びを中断してぞろぞろ道のはしりよける。車の方も子供が退くのを待っているといった具合で、なんとなくのんびりしている。これほど危なっかしいところで事故らしい事故をあまりみないというのも不思議なことだ。

駐車場や工場の車が出払ったあとの空地も、子供にとっては貴重である。そこでは、いくつか残っている車の蔭を相用した“かくれんぼ”やボール遊び、ゴムとびなどが行なわれており、道路より危険度が少ないが、車が帰ってくれば“しめだし”を食ってしまう。

土曜の屋ごろ児童館をたずねてみると、学校がひけた子供がぞくぞく集まって来ている。水曜と土曜に催し的なことをやっているようで、水曜はお習字、土曜は絵を描く会、ものを作る会等その時によってちがう。会といっても、別に格式ばったものでなく、場所と材料を提供するだけで、ちょうど絵を描く会の日にあたっていた。子供たちはクレパスと画用紙をもらって、思い思いのところで絵をかく。もちろん強制ではなく、卓球をしたり本を読んでいる子もいる。しごくのんびりなごやかな雰囲気だ。子供にとって、ここは気軽に遊べる場所であり、卓球や輪投げなんかの道具がそろっていることもあって、なかなかよい遊び場であるらしい。しかし、狭く、アパートみたいな間取りで、とても子供の為の空間とは思えないのは残念だ。

地区内には、2つの公園と1つの空地がある。私が初めてこの町へきたとき、この空き地のそばを通った。金網に囲まれた狭い空き地の中で子供達が遊んでいる。その金網には、「子供に安全な遊び場を」とか「緑の公園を」とか書いた札がいたるところにぶらさげられ、何んともいたましい印象を受けたものだが、この空き地が尻池五丁目の住民運動で、やっとうホントの公園になることが決まっている。公園は尻池街園とかかるも小公園があるが、どちらも公園というイメージからはほど遠い。尻池街園が造られるようになるまでの住民の苦勞を聞いて、台糖の黒っぽい壁と、車がひっきりなしにビュンビュン通る広い道路にはさまれた小さな三角形を見たとき、一種の感慨を覚えたほどだ。どうみても“憩いの場”という感じではないが、このあたりでは貴重な公園なのだ。ところで、子供の利用をみると、やはり道路があるためかあまり利用されていない。時どき2〜3人つれだつてやってきて、ひとしきり遊ぶと帰っていく。

子供たちは、地区ではだいたい上記のようなところで遊ぶが、あまり外で遊ばずテレビばかりみている子や、現代の教育風潮を反映してか、塾、そろばん、お習字と遊ぶひまもなくおいたてられている子もかなりいるようである。

B 子供と自治会

この地区には、自治会組織の中に子供会、母親クラブというのがあり、かぎつ子が多く、遊び場にめぐまれない子供との接触が多いようである。キャンプ、クリスマス、地区の運動会、プールでの水泳大会等の行事、その他、各自自治会独自の遠足、写生会なども行なわれている。私の住む尻池八、九、十丁目福祉会に関係するのでは、たとえば1月30日に、荊藻防犯実践会主催の中学卒業生激励会というのが開かれている。

また、4月2日には、東尻池八、九、十丁目子供会と育成会主催による須磨浦公園へのピクニック、4月23日には運動会<地区全体の子供会の主催>が行なわれた。

子供会の活動は、この地区の子供達にとって大切な機会を提供するが、今、子供会では「今までは大人が前面に出すぎて、大人のための子供会だった」「もつと子供の自主性を大切に……」等々それこそ大人の間で議論がふつとつ中である。が、私のところへ「おねえちゃん、遊ば」といつてやってくる子供たちや、「こんどの日曜みんなで〇〇〇へ、行くから、おねえちゃんつれていつて、大人が一人いかんと学校でおこられるねん」といつておしかけてくる子供たちをみていると、やはり一種のあたたかさに飢えているように思える。そして彼らが望んでいるのは、引牽してくれる先生的な大人ではなく、いつもいっしょに遊んでくれたり、めんどうをみてる「おねえちゃん」や「おに

いちゃん」のような家庭的なあたたさを提供してくれる大人なのだと思う。そのようなシステムを自治会の手で造り上げていくのは不可能なのだろうか……とつくづく思ってしまう。

C おじぞうさんと地蔵盆

この町にはおじぞうさんが45ヶ所もある。この中で最も有名なのが、尻池九丁目のもとな念仏山があったところの念仏山地蔵である。なるほどりっぱで、供物や花も他とは比較にならない。その他のおじぞうさんも、路地裏のつきあたりや、家と家との間の軒下なんかにはちょこんと立っていて、うっかりするとほとんど気がつかずに通りすぎてしまう。一つ一つ注意してみると、やっぱりそれぞれちがっていて、石でできたのや、格子のとびらのついたきどったのや、古い木の粗末なのまでいろいろだ。

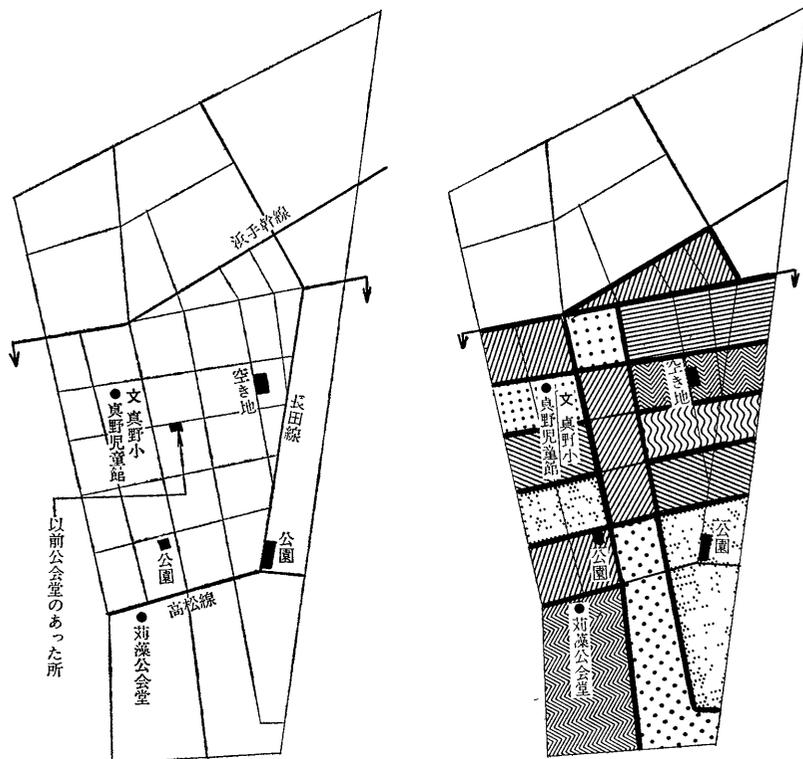
どんなに小さい、粗末なおじぞうさんも、手入れはよくいきとどいていて、ちゃんと花や線香があげられている。これは大きな工場を除いて、ほとんどの住民がどれかのおじぞうさんの守役になっていて、日ごろの世話や、地蔵盆のさいの費用や供物を出すようになってきているからである。守役は一つのおじぞうさんに対して、多くは十数軒から二十数軒、おじぞうさんの少ない場所によっては、五十軒近くというところもある。

誰がどのようにして、おじぞうさんを立てたかほとんど誰も知らないし、維持の規模も形態も、時代とともに様々に変化してきたけれども、地蔵盆という行事は今でも根強く残っている年中行事であり、おじぞうさんの維持費や手入れについては、皆が当然のことと受けとめ、快くそれらを差し出すのである。

子供たちの健やかな成長を願う地蔵盆は、お盆が終るころの年中行事である。昔は、他に何の楽しみもなかったせいも、もっと盛大であり、主婦たちは皆仕事を休んでごちそうを作り、道路には夜店が並んだと老人たちはなつかしむ。時代とともに地蔵盆はだんだん小規模になっているとはいえ、夏にかくことのできない行事であり、町の人々にとつて<特に子供たちにとっては>まだまだ楽しみの一つなのである。

図1 A. 公会堂、公園、空地、児童館の位置

B. 十五ヶ町の自治会組織



VI 町の自治組織と活動

A 住民運動の組織

真野地区の自治会組織は非常に複雑である。というのは、現在15の自治会があり、それらは一つの単独自治会と2つの自治連合会に分かれている。その上、自治会組織とは別に防犯実践会という組織があり、この中で2つの自治連合会が複雑にからみあっている。

▼自治会の組織

そもそも、もとは自治連合会は単独自治会である東尻池三丁目を除いて一つであったという。それが公会堂問題で約15年前に2派に分裂した。北側の自治会は尻池南部自治連合会からぬけ、真野連合会を作ることとなった。このことをきっかけに自治連合会は、北と南に二分されたのである。その後、真野連合会から尻池南部連合会に寝返る自治会があいつぎ、現在にいたっている。

▼防犯実践会

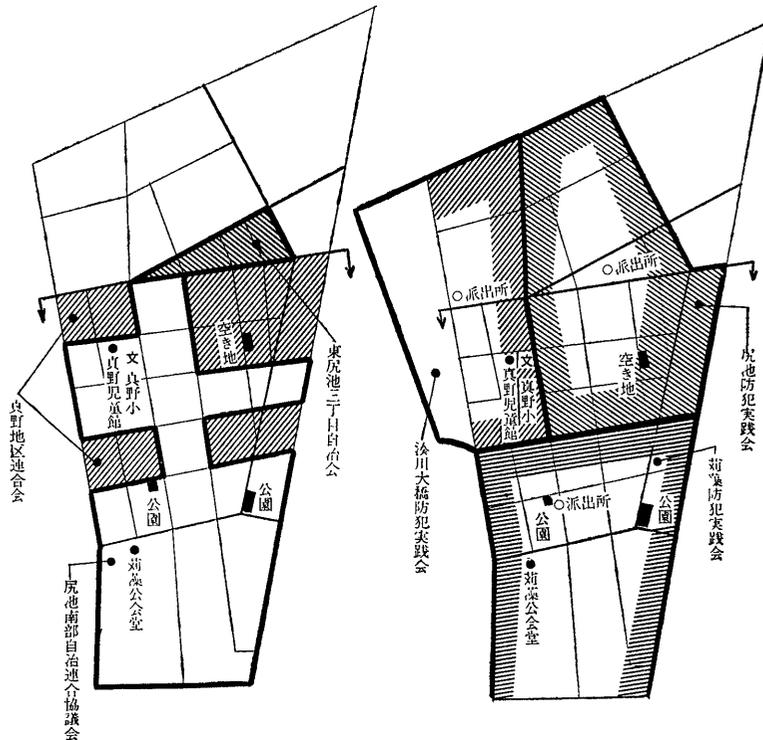
防犯実践会というのは、派出所中心の防犯パトロールなどを手伝うために作られた組織である。真野地区では3つの派出所を中心として、それぞれ湊川大橋防犯実践会、尻池防犯実践会、荊藻防犯実践会の3つに分かれている。このうち荊藻防犯実践会が住民運動に取り組み初め、かの有名な“かるも方式”を展開してきたわけである。

ところで、この荊藻防犯実践会会長は尻池南部自治連合協議会会長と同様Mさんであるが、図をみてもわかるようにこの荊藻防犯実践会に、東尻池七丁目と荊藻通五丁目という2つの真野連合会に属する自治会も含まれている。しかしMさんの自治会の独立性を認め独自のやり方に干渉せず、こと公害問題、福祉問題等住民運動のみ団結していくという柔軟な方針が功を奏してか、自治会相互の問題はない。

他の防犯実践会では、従来の防犯パトロールと交通整理だけで住民運動には取りくんでいない。

図2 A. 三丁目自治会と、真野地区連合会と、尻池南部自治連合協議会

B 尻池防犯実践会と、湊川大橋防犯実践会と荊藻防犯実践会



B 自治活動の実際

▼いままでの足あと

いままでの多くの活動の中から、苦労談などを、MさんやUさんの話を通してあげてみると、今のこの町も2～3年前にくらべるとずいぶんきれいになったそうだ。ごみも住民の良識が育ってきちんと出されるようになったが、以前は、特に年末などごみをとりにこなくなつてからも、町かどにごみがあふれた。夜のうちに、町中からあるいは他の町から、もつとひどいになると車でやってきてすてていくのだ。近所の人の苦情を聞いて、自治会役員が交代で徹夜で見はりに立ったという。

また、高松線ぞいに花だんを造ったときは今では専門家の手によって、グリーンベルトをとりつける際に、きちんと造り直されているが、女や子どもまでがつるはしをもって、毎日曜日ごとに2年間かかって造り上げた。しろうとっぽいではあるけれども、ささやかな花だんができたときはどのような喜びだったろう。

このようなことの一つ一つが、自治会役員と住民との間を密にし、自治活動の歴史を作り上げてきたのだ。しかしながら、自治会役員がだれで何をやっているのか全く知らないような無関心層がまだまだ多いことも事実である。

▼住民大会のひとこま

3月4日、午後8時ころより荊藻公会堂において、荊藻防犯の主催する住民大会が開かれた。私は前々から地区の住民大会の実際を見たいと思っていたので、のぞきに行ってみた。主題は、健康調査の件、陸橋建設の件、コカ・コーラK.K.の件、カルモ鑄工K.K.の件、二葉鉄工の件、食肉市場の件の6つ。集まった人々は、直接被害をうけている人々を中心に40名前後。中、高年婦人、中年男性がほとんどで、若い人はちらほら。

まず、M会長から今日の予定の説明があり、続いて、神戸市の大気管理課から、健康調査の必要性和やり方をわかりやすく説明し、協力を要請した。地域そのものの健康水準をみるのだから……を強調。

次に、施設部長さんが尻池八丁目3叉路にとりつけられる予定の陸橋について、神戸市の案を説明された。簡単な絵を図示して、「橋は三地点にのぼすが、脚の位置のこまかい場所は未定であること、陸橋がつけば横断歩道は撤去したい。」との主旨であった。部長の話によるとすぐにでもこのままとりつけられそうな様子なので、集まった住民たちは、脚が誰の家の前につくだろうかとワイワイガヤガヤ。ところでその後この案は「かるも防犯」の役員たちによって検討なるものが加えられ、ボツにされた。というのは彼らは前々からこの歩道橋は、老人と子供たちが安全に街園へ行ける為のものと考えていたので、坂式の歩道橋がほしかつたのだ。そこで協議の結果、彼らの案一坂にするには道幅がせまいため、歩道橋は少し浮かして、あとは逆に道路を掘り、自動車に歩道橋の下を通っていただき、上の歩道橋は広く公園のように緑などを植える、という案なのだが、それを人間優先という歌い文句とともに神戸市にもっていった。市ではもちろん、案はまことに結構ですがなにぶんにも予算が桁ちがいで、ということでしばらく棚上げの状態になり、今や、尻池八丁目に陸橋がつく見通しは、ここしばらくほとんどなくなってしまった。

食肉市場の件では、1月28日下水道が完成し、川に流していた汚水はそちらに回るようになった。まだ一部の汚水が流れているが、それらは今、下水道をつくるように案を提出中である、とのこと。

次に、問題のカルモ鑄工と二葉鉄工。カルモ鑄工は、「においてはレジンを焼くにおいなのだが、その対策として壁をつくってみた。しかし、風向きに左右されあまり効果はないようだ。煙については煙突を2本つけた。砂については今のところ処置に困っている」ということだ。二葉鉄工の方は、「騒音の苦情があるが、具体的にどのような状態なのかわからないから、今のところ対策など考えていない」という。

このあと、質疑応答が行なわれたのだが、当然ながら、この二つの工場に苦情殺到。まず訴えの張本人であるSさんが、二葉鉄工の騒音に「子供がいてはとてものがまんできかない」とそのひどさを説明すれば、「そうやそうや」と別の婦人が立ちあがる。「私もSさんとこへ行って聞いたけど、そら相当なもんやった。」といえ、まわりでざわめきがおこり、「ブロック積んだらどないやろ」「そら、ブロック積んだらだいぶちがうけど、ちょっとぐらいやったか

てあかん、やっぱり屋根まで積まななあ」「ふうん、屋根までなあ…」などとささやきあっている。彼らは真剣になるべく金のかからない具体策を考える。大会社相手ならともかく、小さな工場ではできることがどの程度なのか、彼らにはよくわかっているからだ。苦情をもってくる方も工場をやっていたり、そこで働いていることが多いのだから……。結局、神戸市の環境何とか課が中にはいり、よく実体を調査した上で、会社側も壁をつけるなりなんなんりの対策をたてる、ということで話がついた。

カルモ鑄工へは、においだって煙だってちっともよくなっていない、とかなり風あたりが強い。Kさんは「あんた、煙突つけたつけた言うけど、あんなもんなんや。風が吹くたびに、あのけむりあんたとこいかんとうちとこへまともやないか」といきり立った。またこの工場の砂については迷惑している人が多く、ある主婦は、「風の吹く日は砂が舞い上がり、戸を閉めていてもたたみや茶が台がざらざらになる。」と訴えれば、また皆まじめに考える。「水をふつたらええんやないか」「何度もやったけど、水は水で下にたまってしても……」「ああ、水をすい込まへん砂やな、そらあかんなあ」うんんと皆考えたけど、それ以上考えつかない。工場主も「あの砂には、うち自身も困ってますんや何かいい方法はないでしょうか」という始末。かくして、煙にもおいても砂も、神戸市がよく調べて、効果的な方法を考えて、工場側に教えてやるべきだ、というようなところにおちついた。

彼らにとって、公害はあまりにも身近で切実だ。しかも多くはお隣同士の争いだ。だから彼らは、こういう場が与えられれば、直接談判よりも、お互い気まづくならず、はっきりした対策の見通しも立つので、こういう集会を歓迎しているのだ。こうして、11時をまわるまで熱心に続けられた。

▼“かるも”の編集会議

日曜日午後7時頃からMさん宅で、地域新聞“かるも”の編集会議が開かれた。出席者は編集長のNさん、会長のMさんはじめUさん、二人のHさん、Pさん、Oさん、それに私の計8名である。

“かるも”は今回で第11号、地域のさまざまな事件を載せてきた。今回は、最大のニュースである「大気汚染の身体影響調査」と「住民集会」が一面、二面はおさまりの「子供会だより」、「街の声」、「防犯だより」、「児童館だより」と、割ふりはだいたいきまっているし、一番面倒な広告とりもこの辺では各店で順番のようになっているので、「こんどは喫茶店にしましょか」の一言できまってしまう。それに「街の声」の原稿も2~3日中にならず書いてくれるような人を4~5人考え、近くの人が責任をもってたのみにいくことになった。新聞づくりにおいて、これほど楽なことはないから、あとはもう簡単だ、とそのとき私は思ったのだが、彼らは何段とか何行とか何字とかいう数字に対して、はなはだいいかげんで、つまらぬところで時間をつぶし、私はだんだん不安になってきた。そしてその不安は、次の編集会議で本物となった。

第2回の編集会議は集まった原稿の校正と割付である。私は、「合田さん、これちょっとお願いします」という調子で、最もしんどい校正と原稿の書きなおしをおしつけられ、「だらう、でせう……」等の書きことばや、奇妙なあて字や漢字を直し、もう半分うんざりしながら、次々書いていった。彼らはというと、あとではきたも同然だと思っていたら、たとえば、もともと10段しかないところを、下3段別の記事にするのなら7段にきまっているのだが、「これだけあかんのやったら、エート1, 2, 3, 4……」「ちよっちよつとまって下さい会長、エート1, 2, 3……」と、みながなぜだかいちいち同じことをやっている。すべてがこのような調子でいっこうに進まない。原稿がそろい、その行数、字数がはっきりしているのに、いったいどれだけ余るのか足りないのか、なかなかはっきりしない。とにかく、だいたいおさまりそうだし原稿が余分にあるようなので、まあよかろうということになった。「まあ印刷屋がよろしいようにしますやろ」「こんどは余分にあるからええけど、前みたいに足りんいわれた時はえらいこっちゃた」などといっている。私はおどろくやら、あきれんやら……。印刷屋も大変だろう。

終わったのは11時をまわっていた。彼らは時計をみて、「今日は早いことできた。前頃は1時2時やった。やっぱりだんだん上手になる」と言ったのだ。私はすっかり感心し、このようなただの町のおじさんたちが、よく新聞を自分たちの手で作り上げてきたものだと、その熱意と努力に敬意を表したいとさえ思った。

— 完 —